高知新聞
夕刊
10月10日(土)
発行所 高知新聞社
高知市本町3丁目2-15
088-822-2111〒780-8572
© 高知新聞社 2015
高知新聞ホームページ
http://www.kochinews.co.jp/

孤立死、突然死…「遺品整理士」の現場

「物ではなく、気持ちの整理」

故人、家族の思いに応え、人生をたたむ手助け

「遺品整理士」。遺族や家族に代わって人生をたたむ手助けをする仕事。県内でも静かに広がるその現場を訪ね、人々の思いを聞いた。

（村上和陽）

処分する物を分別する田中章江さんら（高知市内）

9月中旬の朝。

高知市内のある住宅街に足を運ぶと、目指す民家が見えてきた。

木造2階建ての民家の前で、男性4人が家具や布団などを次々と運び出している。全員が紫色の手袋。ビニールの袋も2トントラックに積まれていく。

ビニール袋の中には、結婚式の引き出物と思われる食器があった。家庭用の手作りアイスクリーム器は数十年前の物だ。

「骨董品があれば残しておいてください。人形はそのまま置いていってください」

家の中では、グレーの制服を着た女性が男性のスタッフにそう指示を出していた。声の主は「リアライフ」（高知市はりまや町1丁目）の田中章江さん(32)。今年1月に遺品整理士の資格を取得した。

10年ほど前まで、この民家では90代の女性が暮らしていたという。認知症を患い、高知市内の施設に入所。その後の一時期、親族が住んだものの、この春からは誰も住んでいない。

現在施設で暮らすこの女性には、司法書士が成年後見人として付いている。高知市の事務所を訪ねた。

「空き家になったので見に行ったら、台所などが片付けられずにそのままだった。この状態ではとても夏は越せない、と」

後見人の依頼を受け、田中さんは民家を見に行く。後見人だけでなく、女性の義理の妹(85)にも来てもらった。

残したいものはどれか。

処分するものは何か。

処分品のうち、買い取りできるものはないか。

要望を丁寧に聞きながら「分別」は進んだ。遺品整理士の仕事は故人だけが対象ではなく、「生前整理」の仕事も多い。

■「何を処分」悩む家族

朝9時から始まったリアライフの作業は、昼すぎに終わった。「分別」に関わった義理の妹はどう思っているのだろう。

「思い出はそりゃ、いっぱいありますよ。捨てようかどうしようか、毎日、悩みました…でも、残された人たちの迷惑になる」

義理の妹自身、夫とこの家で暮らしたことがある。思い出が詰まっている。

女性宅から運び出した物は2トントラック2台分になった。残した物は、20体の日本人形、仏壇、女性の両親の遺影。日本人形はねえさんが好きで大事に集めていたからーと、「存命中は家に置いておく」と義理の妹が決めた。

作業を担った田中さんは「今回は順調でした。4トントラックが何台も必要な家もありますから」と言う。

リアライフには生前整理も含めて月に10件ほどの依頼がある。料金は「2階建て一軒家で20万～30万円が一般的」。玄関まで物があふれている〝ごみ屋敷〟もあれば、孤立死の現場もあった。遺品整理の前に臭いの除去などをする「特殊清掃」も月に2、3件ほどしているという。

■業界の健全化を

遺品整理士は、2011年に発足した遺品整理士認定協会（北海道千歳市）の資格だ。法令や社会的役割といった科目を通信講座で学び、リポートで合格しなければならない。現在、全国に約7千人いる。

業界健全化を訴える理事長の木村栄治さん(50)には忘れがたい経験がある。

5年前、父を突然の事故で亡くした。葬儀後、遺品整理を業者に頼むと、父の背広や記念写真などを乱暴に扱われたという。

「途中で『もういい、やめてくれ』と。断りました。遺族にとってプライベートの最たる部分を見せる。信頼の置ける人でなければ任せられません。故人の希望をできるだけかなえたいと遺族は思ってます」

近隣者や親族ら周囲の目配りも欠かせないという。

「香川県では、室内のごみの下からご遺体が出てきたこともありましたから」

■ぼろぼろの手紙

遺品整理業「くるめ屋」（高知市春野町東諸木）は開業から1年弱になる。同社の乾和広さん(37)も今年に入って遺品整理士の有資格者になった。

「一人一人、故人への思いは違うでしょう？　家族とコミュニケーションを取り、どういう人だったか聴き、そして遺品の整理をするよう心掛けています」

これまでに手掛けた約30件の中には、リアライフの田中さんと同様、孤立死の現場もあった。

死後約1週間で見つかった高知市内の80代女性。その家は、1階がごみで埋め尽くされていたという。

「家族は県外、ヘルパーさんもおらず、近所付き合いもなかった。誰かが気付いていれば、あそこまでなっていなかったです」

高知市内の80代男性の孤立死は、県外で暮らす甥の依頼で遺品整理に当たった。

この男性に子どもはいない。死から1週間、誰も気付かなかった。

乾さんらが机の引き出しを見ると、ぼろぼろの封筒が出てきた。今は60代になった甥が小学校の時に書いた手紙。整理を終えて甥に渡すと、「こんなんまで持ってくれていたとは」と涙を流したという。

乾さんはあの場面を忘れられない。

「単に物を整理するだけじゃない、気持ちの整理もするんだ、と。あらためて感じました」